

〔資料1〕

「あることないこと知己に仮託し」た恥知らずな記録(上) ——石一歌の『魯迅伝』を評す——

石越著 井垣清明訳

〔翻訳資料について〕本誌の「旅の記録」に記載した3篇の論文のうち、今回は「『謬托知己』の無恥記録」の前半部と「石一歌的『矛』和『盾』」の2篇の訳文を掲載する。後者にはまだ、「外二篇」の短文がついていて、それも担当者によって訳出されているが、スペースの関係で割愛する。なお王西彦氏の「蚩蚩的悲劇」も、宇津木恵子女史の手で翻訳されているが、つごうで月報本号ではみあわせることにした。

上海の魯迅研究はいま石一歌の『魯迅伝』批判を当面の課題としているようである。日本でその研究がそうした風潮に同調しなければならぬ必要は毛頭ないけれども、ただ中国の人々が、いまどのように魯迅を読んでいるかは、やはり知っておきたい。(編集子)

※

※

※

1972年、「四人組」は上海で、「石一歌」という名のいわゆる『魯迅伝』執筆グループを発足させた。「四人組」が企画制作した『魯迅伝』は、1973年8月から、彼らが牛耳っていた刊行物に、連載されたりダイジェストされたりして、陸続として発表されはじめた。既に公表されているものは、1927年以降の二章、即ち『^{しぬまでたまたかう}鞠躬尽瘁』と『^{ふたたびこうか}再搗孔^{てんをうつ}家店』、および1927年以前の全章である。1976年4月にはまた、1927年以前の各章を集めて『魯迅伝』(上)として出版した。こうして、元手を惜しまず、くりかえし発表、出版したのは、言うまでもなくその影響を広めるためであった。

「四人組」は、なぜ、鳴り物入りで魯迅を宣伝したのか？我々は、この『魯迅伝』〔以下単に『伝』と略す〕の内容を分析してみれば、自ら答えが出てくるであろう。捏造、改竄、歪曲、その上侮蔑、これらがこの『伝』の基調であり、「四人組」は真実の魯迅に代えて偽造した魯迅を用いたのである。彼らが魯迅を宣伝したのは、魯迅の旗をかかげて、党を乗っ取り権力を奪い取るためであった。

石一歌には、黒い文章をこね上げる時に忘れてならない座右の銘があり、「其ノ一点ヲ取り、我

ガ用ウル所ト為ス」であった。魯迅と魯迅の著作に対しては「其ノ一点ヲ取ル」のがよろしいと公然と吹聴したのは、読者には魯迅を全面的に正しくは認識させまいとする、下心ではなかったろうか？「我ガ用ウル所ト為ス」とは言うまでもなく「組ガ用ウル所ト為ス」であり、なんと魯迅の一生は、「四人組」の党を乗っ取り権力を奪う必要上、新しく塗りかえられたのである。全く反動のきわみではないか！この黒い語句は、魯迅という大旗の裏にひそむ「四人組」の陰險な下心を余すところなく暴露している。

この『伝』の中で、最初に世に出てきたのは、魯迅の生活では最後の段階を書いた一章『鞠躬尽瘁』であった。通常のやり方の様に時間を追って順次発表されてきたのではないので、その間にも当然、文章がたくさんあるはずである。

魯迅は中国文化革命の主将であり、彼の著作は、階級闘争と路線闘争の経験を深く総括した、歴史的記録である。彼が1936年に書いた『三月の租界』では、狄克と名のった国民党特務の張春橋を描き、その活動の軌跡を記録している。この文章で魯迅は、張春橋の「『彼ら』(石越氏按：つまり国民党反動派)に対して媚びをささげ」、「『彼ら』の

ために武器を引渡してやる」といったスパイの本質をズバリと暴露している。三十余年が経過する間に、張春橋は、革命陣営に潜伏し、反革命二面派の手口を使って、党と国家の最高指導権力に直接攻撃をしかけられるほどの高位に這い上っていた。しかし、毛主席の魯迅に学べという再三の呼びかけで、魯迅の著作も日増しに人心を深くとらえるようになった。これは、張春橋にとって目の上のタンコブとなった。石一歌が一刻を争って『鞠躬尽瘁』の章を発表したのは、張春橋のために、この尻尾の隠せない古傷を抹消しようと犬馬の労をとったものである。

言うまでもなく、この章では、魯迅の『三月の租界』に対して一言もふれていない。こうした下心ある改竄を、天衣無縫にみせるため、石一歌は、陰謀術の全智全能を傾注したといえる。

1935年末、魯迅が王明の右翼日和見主義路線に断固として反対していたので、その路線を文芸界で推行していた人間は、魯迅を攻撃しはじめ、「職制的立場」をとって、魯迅はしごとに非積極的であると侮蔑し、魯迅は「今はあまり文章を書かない」と言いたてた。その後魯迅は、「国防文学」の投降主義スローガンになおさら反対し、「文芸家協会」への加入を拒否したので、こうした攻撃はますます烈しくなった。国民党特務の張春橋は、チャンスを座したまま逃がすものかと、マルクス主義を装うと、王明の右翼日和見主義路線を存分に利用し、波風をたてて、『我々は自己批判を行なわねばならぬ』を書き、初めて公然と殺気に満ちてドアをたたいた。時に1936年の3月15日であった。張春橋の真の姿を暴露することになるこの糸スジを隠蔽するために、石一歌は、なんと、徐懋庸が5月2日に魯迅にあてた手紙の上へと、おおいに文章をつくって目標を転じた。もちろん、徐懋庸は魯迅を攻撃しはしたが、石一歌は明らかに徐懋庸を張春橋の身代りにしたてようとしたのである。魯迅への攻撃は徐懋庸から始まり、魯迅

の反撃も徐懋庸から始められたかのような虚構を作ったのである。

こうしてもなお、問題を完全に解決することができないので、石一歌はさらにホコロビを繕わねばならなかった。『伝』のこの章は表面的には路線闘争を極めて強調しているようにみえるが、『三月の租界』を抹消してしまったので、6月以前の魯迅の戦闘にある「空白」が出来てしまった。この人為的な「空白」を「埋め」合わせるために、石一歌は魯迅の病情に対して手段をほどこした。実際は、魯迅は1936年3月初に発病し、10月に世を去ったのであるが、その間3月下旬から5月中旬にかけては一度好転していた。この好転していた間に魯迅は一連の文章を書いたが、その中に『三月の租界』がある。ところで石一歌はどうしているのか？石一歌は、「魯迅はベッドに横たわり……」また「時にはステッキをついて外を歩き」その上「桃花」などが見えた等々という。周知のように3月の上海は「桃花」などは見られない。石一歌はこの手法を用いてあたかも、4月頃の魯迅が依然として病気であり、彼が何の文章も書いていないのは自然のことである、と暗示させようとしている。

最後尾で、この時期の闘争に関して石一歌は総括を行なって、「この年の上半期、『国防文学』騒ぎが始まったばかりの時には、魯迅は断固として反対したが、多くは手紙や談話や若干の文章の中で『たまたまそした』〔訳注：『偶刺之』が原文〕のである」とやら記している。『偶刺之』とは何か？これは、魯迅はこのころ国防文学に反対していたが独立した文章を執筆してはいないということになり、『三月の租界』はとうとう、この一筆で台なしにされてしまったのである。『偶刺之』は引用符の中にあり、魯迅自身が使った言葉だということで、もちろん十分信用できるわけである。ところが、魯迅の1936年の全ての著作と書簡をめくってみても、こういう所の『偶刺之』を見つけ

だすことはできない。1934年6月21日鄭振鐸への書簡の中にこの『偶刺之』があるが、石一歌のいう時間より、まる二年早いのである。魯迅は1936年5月4日に王冶秋あての書簡ではっきりと「近ごろ当地で作家協会が開かれ、国防文学を叫んでいる。私は前車を鑑として加入しなかった。だが英雄たちはこれを国家の大計を破壊するものであるとみなし……、先日既に二つの文を作って反撃しておいた」と記している。この「二つの文」とは、『三月の租界』と『『出関』の「関」』である。石一歌はこのくだりを引用せずに、魯迅のおびたしい著作の中から『偶刺之』の三文字を探し出してきてお茶をにごしたのである。このことは、「四人組」に媚びをささげるためには、彼らはどんなことでもやってのけるということを示している。

石一歌は、国民党特務張春橋が害されようとする問題に、こうした目くらましを使ったのである。「四人組」もこの章を、党をのっとり権力を奪う試金石と考えた。趙高は、秦王朝の権力を篡奪しようとした時に、鹿を馬だといって世論をためしたが、「四人組」とその仲間は彼らの教祖趙高の古い手口を完全に踏襲していた。最初にこの一章を世に出した奥深い意味は、こゝにあったのである。

批林批孔運動が開始されてから、「四人組」は批林をせず、みせかけだけの批孔をし、「大儒をつまみだせ」「党内の儒者をつまみだせ」とわめいて、矛先を我々の敬愛する周総理に向けた。これと呼応するために、『伝』の後期の一章も、『再搗孔家店』の名で、繰りあげて公表された。

魯迅を借りてきては、風雨を呼びおこし言わずして諭らしむ。使ったのはやはり「其ノ一点ヲ取り、我ガ用ウル所ト為ス」という例の手口である。今度取った「一点」は「尊孔」と「売国」である。いわく、「『民族的文化・道德』を高唱するそうし

た孔子を尊ぶ者の売国の面の皮をひっぺがせ、孔孟の道の売国的やくわりをあばきだせ」、「これは、歴史的法則を明らかにする作業である」。つづいて、たて板に水とばかりに、魯迅がこの「歴史的法則を明らかにする作業」を準備するために、どのようにしばしば「嘉業堂」へ本を買いに行ったか、どのように「その他の書店へ探し求めに行ったか」などなど、真にそんな事があったかのように書きたてた。最後には、石一歌は魯迅の名義を借りて、「尊孔」と「売国」の法則まで以下の如くデッチあげた。

およそ儒学者ほど民族的節操に欠けるものはない。異民族が侵入するたびに、いつも「『儒教』を献上申しあげ」「ぺちゃぺちゃ甘えてご機嫌をとり」、あげくのはては、王朝の交代後にもまだ遺老の立場に甘んじながら、「いかなる民族の遺老かをまったく問題にしない」のである。しかも、それら侵入者には、彼らを自分の実の息子と見なす考えなどなかったが、やはり「儒家の大宗師」として供奉するよう命じて、「儒戸」〔訳注：儒学者の家庭〕に「美果」を食わせたのである。

この話の中には、魯迅の言葉がかなり引用されているが、いずれも出所があいまいである。調べてみると、四つの引用文のうち前と後の二ヶ所は『儒術』に見られ、中間の二ヶ所は『阻隔』〔訳注：原名は『隔膜』〕と『病後雑談』に見られる。関係する文章としては、『「小学大全」をかうの記』があげられる。

魯迅のこの4篇の文章の主題についてみると、『儒術』以外はいずれも「尊孔」と「売国」を論じたものではない。そこで、この「法則」を魯迅の原文と対照させれば、どうしてもつじつまが合わなくなり、「其ノ一点ヲ取ル」の正体が暴露されるのである。『阻隔』の文中では、「ぺちゃぺちゃ甘えてご機嫌をとった」かの人物は、「『儒教の大宗師』として供奉するよう命じ」られず、

「儒戸」の「美果」を食するようにならなかったばかりか、逆に「駐屯兵の奴隷となる」という結末であった。「息子」の問題では、魯迅は「彼がそんな被征服者を息子になぞするわけではない。そこで殺してしまった」と書いている。(『「小学大全」を買うの記』)(訳注：この引用文は『「小学大全」を買うの記』ではなく、実はその前の「駐屯兵……」と共に『阻隔』からの引用である。)まさかこれが「美果」ではあるまい。

魯迅のこの4篇の文章の執筆時期についてみると、この中で「尊孔」と「売国」を主題にした唯一の『儒術』は、1934年5月27日に書かれている。『魯迅日記』にあたると、四馬路附近の本屋で彼が本を買ったのは、6月15日であり、「嘉業堂」で買ったのはずっと遅れて11月3日のことである。つまり、「尊孔」と「売国」の「歴史的法則」を総括するために専門的に探していた書物をまだ買わないうちに、魯迅はもう文章を書いていたことになる。しかも文中で総括した法則は、彼がまだ見ていない本から出てきたことになる。ますますもって奇々怪々である。

1934年、確かに魯迅は若干の書籍を意識的に探していた。『日記』の書籍目録によると、それは主として、清朝の文字獄檔の材料および、文字獄で発禁となった文集である。こうした材料にもとづいて、魯迅は一連の文章を明らかに目的意識的に書いて、国民党反動派のファッション的な文化支配を暴露したのである。『「小学大全」を買うの記』『阻隔』『病後雑談』などはいずれもそうした主題である。文字獄と禁書を語り、文化的独裁を暴露する以上、関係者にはもちろんよい結果の出るはずはなく、それをもって「儒戸」が「美果」を食することの例とするのでは、自家撞着ではないか。

しかし、「四人組」が「大儒をつまみだし」「党内の儒者をつまみだす」ためには、これらのいわゆる「儒」者の上に、彼らをつまみだすに足るだ

けのぬれぎぬをきせる罪名を冠しておかねばならず、現実をひそかに攻撃するという目的をとげねばならなかった。そこで、すべてがデッチあげられたのである。「尊孔」だ、「売国」だと、ドラ声をはりあげてさわぎたて、世論をつくりあげていったのである。魯迅に至っては、「四人組」が必要としたのはその名前だけであり、彼らは魯迅の旗をかりて自分の田に水を引いていたのである。

この『伝』中の『阿Q正伝』に対する分析は、「四人組」が党を乗っとり権力を奪う必要に応じて石一歌が魯迅を歪曲した、今一つの典型例である。

魯迅は、『阿Q正伝』の中で阿Qの欠点をたくさん書き、同時に阿Qが欠点を禁句とするのを諷刺した。阿Qの頭にはつり禿げがあり、彼は「禿げ」および一切の「ハゲ」に近い発音を忌みきらい、やがてしだいに広がって「光る」も禁句、「明るい」も禁句、さらに「ランプ」や「蠟燭」までも禁句になった。ところがすこぶる皮肉なことに、石一歌は阿Q以上に阿Qの欠点を忌みきらったのである。この『伝』では、阿Qの欠点に対しては具体的には一言も分析がないばかりか、グループ出版物に発表された時にはあった、ばくぜんとした「未自覚な」「欠点」などといった字句すら、最後には削除されてしまった。まったく徹底したやり方である。魯迅は『阿Q正伝』の中で諷刺的に「阿Qは『むかしは偉かった』し、見識も高いし、しかも『やり手』だから、本来なら『完璧な人物』と称してさしつかえないほどである」と書いている。この『伝』の阿Qは全くもって「完璧な人物」になってしまった。魯迅作品の分析に名をかりて、魯迅の意をさかしまに用いるとは、何ともおどろいたことである。／＼

この『伝』における『阿Q正伝』の分析方法は、江青が用いて文芸創作思想を混乱させた、いわゆる「三突出」の原則を文芸批評に用いた「モデル

ケース」といえる。よりの確にいうならば、この「三突出」の原則を擁護し販売するために、『阿Q正伝』はこのように骨ぬきにされてしまったのである。それというのも、『阿Q正伝』の中で阿Qは、唯一の主要人物であるが、正面人物とはいえないし、英雄的人物ではさらさらない。『阿Q正伝』は20年代に書かれ、当時の魯迅はまだマルクス主義者ではなかったが、しかし問題は、今日にあってもなお『阿Q正伝』が依然として最も広く流布している作品であり、階級闘争が存在し、搾取階級の影響が存在するかぎり、やはり依然として大きな現実的意味をもっているということである。「四人組」は「完璧な人物」を自任し、自

他ともに欺いた、欠点を禁忌した阿Q主義者であった。毛主席は自らの著作の中で「阿Q主義」に何度もふれているが、このことは『阿Q正伝』がもっている巨大な生命力を一番よく説明している。これは疑いもなく、「四人組」が陰謀文芸の理論的支柱としていた「三突出」にとって致命傷であった。魯迅は勤労人民を醜悪に描いたというのか？『阿Q正伝』を打倒するのか？「四人組」にはその志はあってもその力はなかった。最も妥当な方法が、換骨奪胎であり、これこそが石一歌の所業だったのである。〔『上海文芸』1977年10月創刊号〕

〔資料2〕

石一歌の「矛」と「盾」

金同国著 大石敏之訳

偉大な文学者、思想家であり革命家である魯迅はかつて次のように指摘した：ある種の人には「大きな旗をふりかざし、それを虎皮にしたてて自分を包みながら他人をおどかすのである」と。「四人組」は正に一貫してこのようであった。彼らが魯迅の名前を利用して人民をあざむき、その党を乗っ取り権力を奪おうとする反革命の陰謀に役立てることができると感じたとき、自分たちである著作グループをつくりあげて魯迅研究の仕事を独占し、いわゆる魯迅を研究し学習するといった文章を大いに書きたてた。この著作グループがよく使ったペンネームが「石一歌」である。つまり11人の兄弟という意味でもある。

石一歌は3、4年の間にいわゆる「魯迅に学ぶ」文章なるものを大量にでっちあげ、魯迅とその著作に対する歪曲・改竄をほしいままにして、きわめて緊密に「四人組」の反革命の陰謀活動に呼応した。そのため大いに「四人組」のおめがねになったのである。上海で文芸を牛耳っていた「四人組」のある腹心は石一歌の文章を称賛して「路線が正しく、やり方が着実である」と言った。石

一歌の「正しい」というのはどんな路線のことなのか。「四人組」のあの反革命修正主義の極右路線にほかならないのではないか。

「四人組」が崩壊して、広範な革命的大衆はちょうど「四人組」が石一歌を通して魯迅研究の領域で犯した罪状を批判し、流された害毒を清めようとしていた。ちょうどこの時、新聞紙上に『「四人組」が魯迅を歪曲したのは、党を乗っ取り権力を奪うためである』と題する「批判文」が出た。その文章は「四人組」を「批判」し、33字にものぼる長い題をつけた黒い文章の作者呉耕畔を「批判」しているが、「四人組」がはびこっていた時期に魯迅研究の領域での旗頭であった石一歌のことには一言も触れていない。まことに不可解なことだ。「四人組」の魯迅研究の領域における罪状を批判するというのに、どうして石一歌のことだけは触れようとしないのか。これでは「批判」というよりもむしろ罪を許してやっているようなものだ。さらに不思議なことに、この一面識もない人は、「批判」を続けていくうちに突然、自分たちが去年書いたある文章が「四人組」一味によっ